

「100 平方メートル運動の森・トラスト」 と絶滅種の復元

石城謙吉

059-1502北海道勇払郡早来町北進,北海道大学名誉教授,しれとこ100平方メートル運動地森林再生専門委員会座長

100 Square Meters Forest Trust and Restoration of Extinct Animals

ISHIGAKI Kenkichi

Professor Emeritus of the Hokkaido University, Chairman of the reforestation specialty committee of 100 Square Meters Forest Trust, Hokushin, Hayakita 059-1502, Japan. *k-ishigaki@coral.plala.or.jp*

Shiretoko One Hundred Square Meters Movement was started in 1977, as a donation project in order to repurchase formerly cultivated land. In 1997, this was shifted to 100 Square Meters Forest Trust, as new stage for restoration of old growth as ever. At the beginning of this stage, a revival plan was started to restore extinct animals to reconstruct the original fauna in Hokkaido. For the first project, eggs and fry of Masu salmon were discharged in 1998. Furthermore, five species of birds, Blakiston's fish-owl, White-tailed eagle, Goshawk, Black woodpecker, Marbled murrelet plus two species of mammals, wolf and otter, were chosen for restoration. It is estimated for the five species of birds to come back to the area advanced forest restoration is needed. The use of artificial means to encourage reintroduction is a topic for further discussion. For the Wolf and otter to be revived they must be reintroduced into the area from elsewhere. Though carnivore reintroduction has no precedent in Japan 100 Square Meters Forest Trust, with support of nation wide peoples, hope to restore nature to its original state and become a starting point for solving this problem in Japan.

しれとこ100平方メートル運動の課題

昭和52(1977)の「しれとこ100平方メートル運動」の呼びかけが全国的に大きな反響を呼んだのは、それが日本のナショナルトラスト運動のさきがけの一つだったためばかりではない。この運動が従来のナショナルトラストの常識を覆す内容のものだったためでもあった。一般のナショナルトラストが既存の自然や文化財を「保存」するための運動であるのに対して、100平方メートル運動は、失われた自然の「復元」を目指すものだったからである。

昭和40年代からの土地ブームの中で、つぎつぎと買い占められた知床国立公園内の開拓農地を全国の市民の協力によって買い戻し、これを森林に復元しようという呼びかけは、昭和37年(1972)に政府が「全国総合開発政策」を打ち出して以来日本中を席卷していた開発万能主義に対する鮮烈

なアンチテーゼでもあった。運動に寄せられた多くの支持はこれに対するものだったと言っていい。

こうして「復元」を旗印として始まった100平方メートル運動は、平成9(1997)年に、それまでの20年間の活動を踏まえた新たな展開として「100平方メートル運動の森・トラスト」をスタートさせた。それにともなって、運動地全体に関わる長期目標として次の三項目が掲げられた。

- 1) 本来この地にあった原生の森を復元する。
- 2) 本来的な野生生物群集と自然生態系の循環を再生する。
- 3) トラスト資産としての運動地の適正な公開と保全のシステムを構築する。

これによって、100平方メートル運動の目指す「復元」が従来の林業的手法による人工林造りなどではなく、運動地にかつてあった“原生の自然の復元”を目指すものであることが改めて明確に

示されたのであった。

森林再生専門委員会による絶滅種復元への取り組み

原生の自然を復元しようという、国内のナショナルトラストでは他に例のないこの取り組みを始めるにあたって、同年に森林再生専門委員会が設けられた。それ以来、860ヘクタールの運動地を対象に、この委員会を中心として自然復元のためのさまざまな作業がすすめられてきている。その主な内容は、運動地内の自然環境を河岸段丘斜面、河川・河畔林、台地上、自然草原の四つの類型にまとめてそれぞれの自然復元の方向を定め、その上でそれらを含む運動地全体を五つの区画に分けて1年1区画ずつの5年回帰体制で作業を継続しようというものである。

そしてその一方で、森林再生専門委員会は先にあげた三つの長期目標の2)に関わる不可欠のものとして、絶滅種の復元、すなわち現在は運動地内には見られなくなっているがかつては生息していたと考えられる生物種の復元を取り上げた。このことなくしては本当の意味での原生の自然の復元にはなりえないと考えたからである。そこで、第一次復元生物として、平成9年にまずヤマメが取り上げられ、これに続けて第二次復元生物の検討がこれまで進められてきた。

第一次復元生物ーヤマメ

第一次の復元対象生物として最初に選ばれたヤマメ（サクラマス）は北海道の代表的な溪流魚の一つであり、またその降海魚であるサクラマスはカラフトマスやサケよりも季節的に早く遡上して海域の栄養を陸域生態系に供給する重要な存在であるが、運動地内を流れる岩尾別川、幌別川とも、1970年代に姿を消してしまっていた。

計画に基づいて平成11（1999）年から稚魚と発眼卵（卵内で胚発生が進んで眼が外側から見えるようになった状態、外部刺激への体制がもっとも強く運搬などに適した時期）の放流が始められ、また放流した稚魚のその後の状況や発眼卵の浮出成績の調査も続けられてきた（知床森林再生専門委員会 2003）。この放流の結果、最初に放流された稚魚や卵の回帰年にあたる平成14年（2002）からサクラマスの回帰・産卵が見られるようになった。しかし現状では回帰個体数は少なく、そのた

め産卵数も少数である。またこれまでの調査では産卵後の孵化率、浮出率も低いレベルに止まっている。その原因については現在調査中であるが、岩尾別川の場合には水系内に現在12基の砂防ダムがあり、それが河口近くからすべての支流にまで配置されていることから、それによる遡上障害のほか、ダム下流域における河床構造の変化や水質の悪化なども考えられている。

こうした状況から、ヤマメの自然繁殖個体群の定着に向けて今後更に環境調査が必要である。

第二次復元対象生物の検討経過

一方、この間に森林再生専門委員会は第二次復元対象生物検討委員会を設け、ヤマメにつぐ復元対象生物の検討を続けてきた。その結果、平成13年（2001）にシマフクロウ、オジロワシ、オオタカ、クマゲラ、マダラウミスズメの5種の鳥類とオオカミ、カウソソの2種の哺乳類が洗い出された（知床森林再生専門委員会 2002）。

このうち5種の鳥類は、シマフクロウが絶滅危惧IA類（CR）、オジロワシは絶滅危惧IB類（EN）、オオタカとクマゲラは絶滅危惧II類（VU）、マダラウミスズメは情報不足（DD）として、いずれも環境省のレッドリストに掲げられている希少種である（環境省 2002）。しかしこれらの鳥類は運動地内での定着・繁殖は見られないものの、北海道全体で絶滅してしまっているわけではなく、知床半島内の運動地近隣地域にも生息している。

これに対して、ここで取り上げられた2種の哺乳類は、北海道全域ですでに姿を消した絶滅種である。オオカミは明治20年（1887）前後、カウソソは大正末期頃（1920年代）に絶滅したとみられている。

したがってその復元を考える場合、対象として取り上げられた5種の鳥類と2種の哺乳類とは、復元の意味、方策や問題の規模がまったく異なってくる。そこで森林再生専門委員会では5種の鳥類と2種の哺乳類とを分けて検討を進めることにしてそれぞれの作業を続けてきた。それらの検討結果が今号の別稿で述べられることになっている。

再導入問題への基本姿勢

ここで絶滅種の再導入問題に関する、100平方メートル運動の立場について簡単に述べておきた

い。

絶滅種の再導入は、導入後の定着条件、他地域から導入する個体群と絶滅した個体群の遺伝的整合性、また、それが肉食獣である場合には、畜産業、漁業をはじめとする一次産業への影響や人への危険の有無、さらに定着が実現した後の分布拡大など、全道規模の検討を要する問題が少なくない。それにもかかわらず、森林再生専門委員会をあえてこれらの哺乳類の復元の可能性を検討してきた。

その第一の理由は、先にも述べたように、100平方メートル運動が旗揚げの時から揚げてきたテーマが、原生的自然の復元であることにある。オオカミとカワウソは、それぞれ森林と河川の生物群集の頂点に立つターミナルアニマルであり、これを欠いたままでは原生的自然を復元したことにはなり得ないからだ。“知床で夢を買いませんか”の呼びかけの、その大きな夢の一つとして我々は考えた。

また、肉食獣の再導入が今や自然保護活動の重要な課題として今や世界の各地で取り組まれつつあることも動機の一つだった。ヨーロッパのいくつかの国やアメリカでは、すでにオオカミ、オオヤマネコやオジロワシなどの再導入による復元が実現している。こうした動きは、今後さらに世界各地に広がるものと思われる。

オオカミ、カワウソの復元は100平方メートル

運動の一存で行えるものではない。しかし、森林再生専門委員会は、自然復元への全国の多くの人々の夢を担う100平方メートル運動が、その趣旨に照らしてこの問題を社会に呼びかけるに相応しい立場と考え、その論議の足がかりとなる資料を集めてきた。そして、将来多くの社会的論議を経た後に、この運動地が日本における絶滅種復活運動の発祥地として、オオカミ、カワウソの北海道における復元の拠点になることを願っている。

引用文献

- 環境省（編）. 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－2 鳥類. 278pp. 財団法人自然環境研究センター, 東京.
- しれとこ100平方メートル運動地森林再生専門委員会. 2002. 「100平方メートル運動の森・トラスト」に係わる第2次生物相復元対象種の検討業務報告書, 平成13年度. 20pp. (財)自然トピアしれとこ管理財団, 斜里.
- しれとこ100平方メートル運動地森林再生専門委員会. 2003. 「100平方メートル運動の森・トラスト」に係わる生物相復元事業－サクラマス溯上・産卵状況調査業務 平成15年度報告. 28pp. (財)自然トピアしれとこ管理財団, 斜里.